

## 前田英樹教授を送る

佐藤 一彦

さとう かずひこ

立教大学 現代心理学部映像身体学科教授 映像プロデューサー

わが立教大学現代心理学部の創設に力を奮われ、なによりも映像身体学科の重要な骨格を用意し、名実ともに学科を長く牽引して来られた前田英樹教授が今年度いっぱい定年退職されることになった。私たちを支えてくれていた大事な精神的柱が消え去るようでなんとも寂しい思いが残るが、こればかりはしかたがない。むしろ今後の映像身体学科と映像身体学の充実を、教員も学生も残された全員が委ねられたわけで、これからはこの大きな課題にしっかりと応え、承継していかなければならないのだ、と今は思う。

ここでは、前田先生をお送りする言葉に代えて、些か私事にわたるが、幾つかの忘れたい思い出を記してみたい。私が初めて先生にお目にかかったのは、2002年の冬にさかのぼる。その頃、スカパー！（SkyPerfecTV）で『Edge』という番組が放送されていた。これは詩人の城戸朱理氏を企画者に、毎回現代芸術や現代思想のトピックスを取り上げるというシリーズだったのだが、あるときその城戸氏が、前田先生の当時上梓されたばかりの新著、『倫理という力』（講談社現代新書）を取り上げたいと言い出した。「なぜ人を殺してはいけないのか」という根源的な問いを課題に、現代人の道徳と心を論じる広く話題にもなった好著だ。当時私はフリーランスで主にテレビ番組の制作の仕事に就いていたが、たまたま1995年から雑誌『批評空間』に連載されていた前田先生の批評文『小林秀雄』を読み、前田英樹という書き手に関心を持っただけでなく、その後『現代思想』に連続掲載された武術家・甲野善紀氏との対談『剣の思想』も合わせて読んでいたことから、その番組のディレクターを勤めるのによろしかろうと判断がされた。（実ははじめのうち私は、批評と武術といういかにも相異なって見える二つの連載が、なぜ同じ名前の人物によってなされているのか、そもそもこれは同一人物の仕事なのかどうか不思議に思いつつも、批評と剣術の二つに通底する何かがある

のではないかと感じていた。実はそこにこそ、のちの映像身体学の骨格の広がりがあることを理解するのはもうしばらくあとになる) 今から思えば、それは偶然のめぐり合いだったような気がする。そして実際にその頃、現代心理学部創設の話が着々と進み始めていたのだ。前田先生は撮影や打ち合わせの合間に、熱情をもって新学部新学科開設への期待と意気込みを話された。その話しぶりは、少なくとも学問と遠く離れた場所にいる私なぞにも、「まだ見ぬ映像身体学科」の可能性を強く感じさせるものだった。しかし、私にとって前田英樹という人物は、そんな一般的な意味での大学人・研究者というよりも文筆家、あるいは小林秀雄が論じた「言葉の正確な意味での批評家」という印象のほうがはるかに強い。また『剣の思想』という著書があるように、前田先生は新陰流という室町時代以来の剣術流派の優れた遣い手で、今も多くのお弟子さんを集め剣術の勉強会を主宰されているほどだ。前記した番組の折、その稽古風景をじっくりと拝見したが、長身に道着と袴をつけ袋竹刀ふくろしなを手に、すくっと立って流儀を教えられる背筋の伸びた姿や、時には外国人の入門者を相手にフランス語をあやつり、太刀筋の動きなどを伝授される毅然とした様子は、素人眼にもまさしく剣術家そのもので、日頃感じていた万年青年さながらの鷹揚とした風貌とも重なって、とても雄々しく見えたものだ。もちろんこの剣術家としての側面がその後、映像身体学科の身体論の質的強化に大きく役だっていたことはいままでもない。

ところで、誰もが知るように前田先生は、ソシュールの言語学から始まって、そこにバルクソン哲学を繋ぎドゥルーズ映画論を交え、現在では映像身体論の開拓者であり専門家である。だが実は、そうした西洋哲学や西洋思想に源を発する系譜とは遠く離れて見える、日本の古典や思想・宗教などについての著作も数多く著されている。『日本人の信仰心』、『民俗と民藝』、『剣の法』、『信徒 内村鑑三』などがそれにあたる。空海をスピノザやマラルメと同じ言語論のテキストとしても論じられている。西洋や東洋という区別ではなく、潜在的実在への信仰の系譜というのは、広く世界的にあるのだという独自の見方だ。だが特に、日本にまつわる幾多の文章を読んでいて感じることは、何よりも日本語の論理的散文としての滋味深さとそのことによる明解さ、そして丁寧さである。おそらく若い頃から小林秀雄を長く読み込まれてきたこともあるのだろう。読む側はその残り香をうっすらと感じつつも、それこそ小林の言う〈批評の意匠〉などに取り込まれることのない、自分の〈身ひとつ〉で編み出してこられたのだと思う。無駄なく冴えた、明朗で清々しい独特の文体であり、文章である。その前田先生ならではの

の文章作法が何となくわかったのは2009年から2010年にかけてのことだった。

小林秀雄と並んで昭和の文芸批評を代表した保田與重郎<sup>やすだよじゅうろう</sup>の生誕百年を迎えようとしていたその年、戦後、保田が京都に興したある教育出版社からの依頼で、私は保田與重郎の評伝映像をつくることになった。先方の出版社は映像とともに保田の入門的な解説書を出したいという意向だった。そこでその本、『保田與重郎を知る』の執筆を前田先生にお願いし、私が保田に関する映像をつくることになった。この共同作業は私にとってきわめて刺激的な勤めになった。もちろん保田與重郎は、戦前の日本浪漫派から始まり、若い世代にとっては未知の存在であろうし、かつてその読者であった年長の人びとには、その日本回帰的な作品が、遠い昔のど元に突き刺さって残された魚の小骨のようで、恐る恐る再会せざるを得ないとても難儀な存在だ。だが前田先生は保田について、二十代の頃から読み始めその独創的な和文脈から作り出された論理に強く惹かれていたといわれ、軽々とこの入門書執筆に取り組まれた。映像は保田が生まれた奈良県・桜井にある大神神社<sup>おおみわ</sup>と隣接する明日香村の棚田を一年以上かけて丹念に撮影をし、古代から続く日本の農耕と祭祀のようすを保田の文脈に沿って明らかにしようとするもので、合わせて京都・嵐山に近い鳴滝に残る保田與重郎の旧邸「身余堂<sup>しんよどう</sup>」を撮影した。この身余堂は民藝運動を主導した河井寛次郎の高弟で陶芸家の上田恆次<sup>つねじ</sup>が昭和30年代に、京都の古い農家を念頭に置いてつくったものだが、西洋風に媚びたところが一切ない、古風で身綺麗な家だ。撮影ではこの身余堂の書齋で前田先生に保田與重郎についての解説を願ったのだが、そのとき語られたことは今も忘れられない。保田與重郎の多くの「文業」は(と、そのとき前田先生はそう語り始めた)、この家(身余堂)の申し分のない端正さとともにあり、それは外側の何かに反発するのでもなく同調するのでもない、自分の生業にきちんと立ち戻りそれに正面から取り組む、そんな暮らしぶりの中にこそ生まれ出たものだ、というものだった。おそらくそれは、前田先生自身が自分に課している暮らしぶりともどこかで重なるのだろう。私には不思議に納得のいくものだった。批評家の文業と暮らしぶりについては、いま『新潮』に連載中の『批評の魂<sup>つまびらか</sup>』にも詳だが、日本の思想とそれを表す文章というものが、そうした形で造形・抽出されていくことを私は改めて教えられた。それだけでなくその造形の筋道は、映像身体学の根底にも、同じような明晰さや落ち着きをもって加わってくるのではないか、と不意に思った。

『保田與重郎を知る』の中に以下のような一文がある。

古来、すぐれた庵を持ち、そこで生涯の終わりを生きることは、日本の文人の大切な事業でした。自堕落な生活をし、自分ひとりの境遇を嘆き、頭脳だけで拵<sup>こしら</sup>え上げたリアリズムで物を書く近代の文士には、こういうことはもうほとんどわからなくなっている。保田には、彼に対して、後鳥羽院、芭蕉、宣長が明らかにしてくれた日本文芸の「系譜」を継ぐ熾烈<sup>しれつ</sup>な志があった。身余堂での保田與重郎の暮らしは、彼のこの文業の性質と切り離すことのできない見事な振る舞いとしてあったのです。

それは私には、ひとつの戒めとして十分なものだった。

前田先生は今、ご退職のあと、剣術の稽古場とするための道場を、ご自宅近くに普請中なのだと聞いた。大学を退かれ、いよいよ本業の道を歩まれるのであろう。剣術の研鑽を傍らに置きつつ、ご自身が理想とされる文業が達成されることを願うばかりである。